

40代 女性 入院期間 2018年5月～8月

限界まで頑張った主婦業と仕事、やっと自然療法で癒された。

入院までの経過

幼少児からアトピー性皮膚炎のステロイド外用治療を行っていた。学童期では四肢屈曲部のみの病変だったが、高学年からは改善し乾燥程度だった。その後は就職・結婚・出産を経験したが、この間はたまにステロイドやプロトピックの塗布を行う程度で経過。

入院の10年前にあたる2008年から腕に慢性的に湿疹が生じ、ステロイド外用を使用していたが次第に効果が薄れ、抗生剤の内服で幾分の効果を得ていた。

2014年よりステロイド外用は一層効果が低下し、ステロイドの量が増加したため、減量を目指しイソジン塗布療法を併用したが一時的な効果しか得られなかったため、全身にプロトピック塗布を行うようになった。

2016年よりステロイド・プロトピックの効果がなくなったため、同年4月から脱ステし漢方を始めた。しかし、効果はなくリバウンドで全身に強い痒みを伴う重度のアトピー性皮膚炎が生じた。主婦業と仕事は時折休みながらも気力で耐えて2年間継続していた。

2018年2月にケーキを食べてから症状は一段と悪化、気力も低下し全身に掻破傷・痒み・浸出液・落屑が生じた。

全身倦怠感と不眠で近医にて睡眠導入剤処方を受けていた。

体力・気力の限界を感じ4月末から休職。休職直後に当院の存在を知り入院療養となった。

		入院時	1ヶ月経過	2ヶ月経過	3ヶ月経過	退院1ヶ月後
	基準値	2018/5/7	2018/6/8	2018/7/7	2018/8/10	2018/9/14
TARC	450以下	4956	2420	1066	418	400
LDH	120～245	418	479	355	276	255
IgE	170以下	15058	13928	12878	11865	11048
好酸球	7%以下	20	14.5	5.4	3.3	7.7
POEM（自覚症）	最重症者 20～28	24	21	17	13	2

入院後の経過

全身に非常に強い最重症タイプのアトピー性皮膚炎があり、全身の浮腫み・発赤・悪寒が強く、「職場では周囲からゾンビーだという印象をもたれていた」と本人談。

前向きな性格だが入院当初は歩くのもつらそうだった。全身の滲出変化もあり、一見するとTARCは10000を超えていても不思議はないほどだった。

大学2年と中学3年の子供さんとご主人との4人暮らしだが、実家のお母さんに家事をサポートしてもらっての入院。

入院から1ヶ月で炎症が改善し始め、体力も回復。その様子に家族も大喜びであった。

入院から3ヶ月が経過するとTARCは正常値に改善した。

9月の退院後初めての外来受診時、気温はまだ高く汗をかきやすい気候であったが、自宅でのBSC継続で皮膚は好調を維持し、自覚症状も大きく改善。食事療法の効果もあり、スリムになって職場復帰したが、同僚は余りの人相の変化に本人だと気づけなかったそうです。

ステロイド・プロトピックの効果がなくなったという事は、免疫抑制治療では病原菌感染を誘発してしまい、限界が来ている事を示しています。そうなったら免疫を自然な方向に転換させてあげる必要があります。

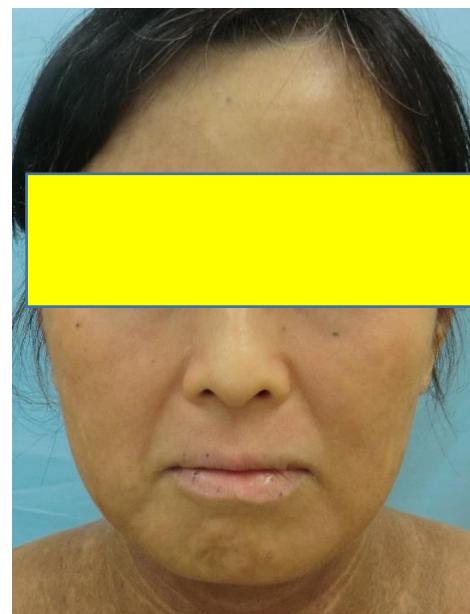
最近、免疫療法薬として健康保険にデュピルマブの注射薬が採用されました。

IL-4、IL-13のブロックモノクローラル抗体である注射薬を2週間毎に皮下に注射する治療で、薬価は1ヶ月163,280円。3割負担でも月50,000円程度の患者負担となります。しかし、原因療法ではないので永遠に打ち続ける必要があります。副作用も多々あります。

人の免疫は複雑であり、2つのサイトカインをブロックする事は、長期的には様々な障害が現れてきます。IL-4やIL-13が単にアレルギーのみに関与しているなどという単純なものではなく、癌や感染、自己免疫といった免疫システムに必ず障害が来てしまいます。

人の皮膚免疫の発達の歴史は4億年前の両生類の時代から始まり、土壌バクテリアと皮膚免疫は長い年月をかけて共進化してきたのです。

本来の免疫への転換は、人が自然の一部であるというポジションに立ち返ることによって初めて達成できるのです。





入院時

退院時

